

(3) 「育てたい力」を検証する一人一事例研究

ア 平成 28 年度の一人一事例研究の取組

「育てたい力」一覧表を検証する目的は、キャリア発達を支援するための学習内容の精選です。一人一人の事例研究において“教えるべき”学習内容を整理し、年間を通じてキャリア発達を網羅していくこと、「育てたい力」一覧表を網羅していくこと、そして、本校から社会へ送り出していく人材像としてふさわしいかを確かめる必要があると考えます。

平成 28 年度の事例研究の取組は、次の 3 つの方法で個々の児童生徒が確かに育つ授業づくりになっているかを検証しました。

(ア) 個別の指導計画とリンクさせた事例研究 (ARA・SHI の教育プログラムとの関連)

個別の指導計画における身に付けさせたい「かかわる力」「きめる力」「はたらく力」を、年間を通じてどのように教育活動を展開し、ARA・SHI の教育プログラム概要図を基に、個別の指導計画、学習指導案、評価とのリンクを図りながら個々の児童生徒にとってどのような育ちにつながるかを検証する。

(イ) 単元における授業づくりシステムの運用と単元を通して身に付いた力に関する事例研究(単元における授業づくりと育てたい力との関連)

各教科、各教科等を合わせた指導、自立活動等において、一つの単元をとおして行われる授業づくりで、○スタイルの活用や授業づくりミーティング、評価規準の設定、授業評価の一連の授業づくりシステムの有効性の検証を行う。また、個々または集団の児童生徒に身に付いた「かかわる力」「きめる力」「はたらく力」の 3 つの力について検証する。

(ウ) 個人のテーマ設定における事例研究(個々の児童生徒への課題設定と育てたい力との関連)

教育課程に関する研究、本校キャリア教育推進の 6 年間での個々の児童生徒の育ち等について、個別に設定したテーマにおける事例研究を行う。特に、本校キャリア教育推進の 6 年間での個々の児童生徒の育ちについて、児童生徒に関するこれまでの個別の指導計画や関係資料を基に、キャリア教育実践に取り組んだ児童生徒の成長とキャリア教育推進の有用性について検証する。

上記の事例研究において、キャリア教育を推進してきた 6 年間及び児童生徒の発達の連続性を捉えた授業づくり・評価・改善サイクルの確立に向けた 3 年間の取組の有効性を検証しました。

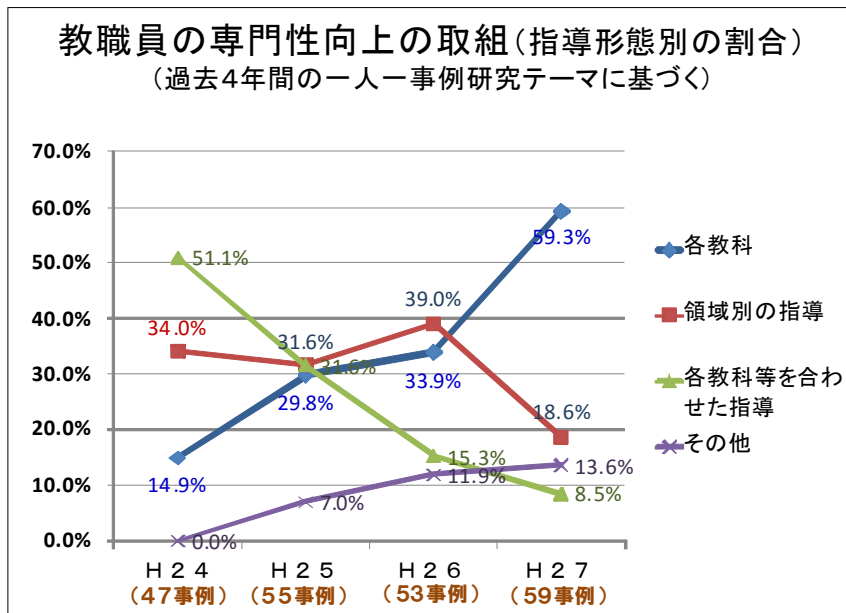
事例研究をとおして、教職員が個々の児童生徒の学習評価と個に応じた指導の充実につながる指導の評価について議論し、必要な知識を身に付け、専門性や実践的指導力の向上を図りました。

イ 学習内容の充実のための取組

平成 27 年度までの 4 年間の事例研究は、一人一人の教育的ニーズをキャリア発達という視点から捉え、「育てたい力」一覧表をキャリア発達の視点に基づくニーズを捉えるツールとして活用したものでした。それらを指導形態別に見みると、この取組を始めた平成 24 年度は、各教科等を合わせた指導に関する事例研究が多く、全体の 51.1% (24 事例) でし

た。それが平成 25 年度には教科別の指導、領域別の指導、各教科等を合わせた指導の 3 つとほぼ同数になり、その後、教科別の指導に関する事例が急増し、昨年度は全体の約 60% が教科別の指導をテーマに挙げて、事例研究に取り組んでいます。

これは、知的障害教育の学習内容を各教科の視点で見直し、個々の児童生徒に何が必要かを、学校教育法施行規則の知的障害特別支援学校の教育課程の編成として基本的な考え方に回帰した結果だと言えます。さらに、これまでの取組の良さを活かしながら、特別支援学校学習指導要領がベースとなることを全員が認識した結果であると言えます。そうして、各教科の内容が、どんな段階で、どんな範囲で、どの程度、どの視点で構成されているかに配慮し、学習内容を捉えることにしました。



※本校では、平成 24 年度以降、全教職員による一人一事例研究及びポスターセッション形式による事例検討会・報告会を開催し、専門性の向上を図っています。

※平成 24 年度以降の 250 を超える事例研究の実践を、授業づくりや学習評価等の教育活動の充実に活かしています。

ウ ボトムアップアプローチ — 一人一事例の取組から —

事例研究のキーワードはつなぐ教育でした。知的障害を有する児童生徒にとって、どのような教育を行って行くべきか、そして、教師の“思い”をどれだけ形にして伝え合うか、を視点として、「ひと」「もの」「こと」について過去・現在・未来がつながっている状態であることが望ましいと考えました。一人一事例研究の取組は、特別支援教育において、児童生徒が「生きる力」を醸成するためにはどのような教育課程が望ましいのかを一人一人の教師が考える機会となりました。

過去 5 年間に渡る取組である一人一事例研究には大きな教育効果がありました。若手も中堅もベテランもみんな一緒になって取り組み、自分自身の実践を語り、意見交換を行いました。他の教師、他学部がどんな取組をして、どんなことに課題があるのか、その一つ一つの実践プロセスを間近で見ることができました。チームアプローチで個々の教職員の専門性はもちろんのこと授業力のアップや説明責任を果たす機会にもなり、新転任の教職員を育てる場、教師間の学び合いを保障する場にもなっていました。この取組は 5 年目となり、自己の教育実践を自己の中で個人研究にとどめるだけでなく、その再現性を考慮し

たり、個々の取組が教育課程の編成に向けた話題提供の場になったりしていました。異なる価値観をもつ人たちと関係をつくりながら、今、ここに必要な教育を組織の構成員一人一人が考えていました。

キャリアⅠ期（平成23年度～平成25年度）は、「学校システムの再考」を柱とし、学校が組織的に機能できるようにするための基盤を築きました。「学校システム」という言葉の響きには、教育システムや研修システムのように組織改革と直結するイメージが強いが、実際には授業改革と直結したことの方が多い。PATHミーティングによる支援会議、「育てたい力」一覧表、指導案改訂やチームアプローチによる授業づくりなど、家庭・関係機関・学校がそれぞれの機能を活かすことができる基盤を築くことができました。

このような取組の積み上げと前研究主題における取組の成果がそのまま引き継がれ本研究主題の「ARA・SHIの教育プログラム構築」の基盤となりました。また、本研究は、より子どもたちに寄り添い、子どもたちにどんな力を身に付けさせたいかということが一番に掲げていました。子どもたち一人一人が確かに育つ授業づくり、一人一人の教育的ニーズに応えうる教育課程の編成のための実践でした。

今年度の公開研究発表会の実践発表では、これから求められる資質・能力をどのような教育内容と教職員の集団組織で培っていくのかという提案をしていくことになりました。どのような教育計画、指導内容で教育を行っていくのかは、特別支援学校学習指導要領解説に明記されている『適切な指導内容の選択、指導内容の組織、授業時数の配当』の3項目をベースとして、それに各学習グループ独自の視点を入れたうえで教育課程を編成するシステムづくりに取り組むことになりました。

平成28年度の一人一事例研究では、教師全員が、「育てたい力」一覧表の運用とARA・SHIの教育プログラムに基づく実践発表として、児童生徒に最適な教育を行うための指導内容及び指導方法のもと、個々の児童生徒が確かに育つ授業づくりを提案しました。